

仕事の後、神楽坂で。

私の職場は神楽坂にあるので、平日は殆ど神楽坂で過ごしている。

実は、住まいのある某所よりも、友人、知人、顔見知りが多く、神楽坂界隈をうろうろしていると自分のテリトリー内にいるせいか、気持ちが落ち着いて心地よいのである。

仕事が終わると、大抵は真っ直ぐ家路には着かず、馴染みの店々やお気に入り、の場所をふらふら寄り道して帰る。その日の気分で、今日はあの人の顔が見たいと、思いつくまま訪れる。訪れられた方の心中は存ぜぬが、皆嫌な顔一つせず、適当に相手をしてくれる。私もあまり長居をせずに（相手に寄るけれども）、あうんの呼吸で仕事後のゆっくりとしたヒトトキを過ごすのである。

神楽坂には多種多様な人が集うことも有り、人の歩く早さが多様である。皆それに慣れており、各々がそれぞれのペースで気兼ねなく歩いている。赤ちゃんにお年寄りに男性に女性、企業人や芸者さんや商店の方やその他様々な職種の人、フランス語、英語、韓国語、中国語、日本語、その他の言葉を母国語とする様々な言語の人、そして、小型、中型、大型と、大きさや犬種の多彩な可愛いわんちゃんまでもが、それぞれのペースで歩く。歩く速度の違い同様、多様な人が居るといのがこの街では当然のことであり、街の人達も人々の有り様をそのまま受け入れてくれる。流行や、型に填めずに、等身大の自分で居ること、また相手に同じものを求めることなく、そのままで居ることを普通に提供してくれる、大らかで素敵な街なのである。

商店街の活気溢れる喧喚から離れ、ちょっと路地裏に入り込むと、街の雰囲気のがらりと変わる。夕方なら、料亭からゆったりとした灯りが漏れ、背の高い黒塀の向こうからは三味線の音が聞こえてくる。その塀の狭間の細い石畳を歩くと、小径に自分の靴音がこつこつと響く。たまに、小さい運搬用のトラックの荷台に氷を乗せ、背中をこちらに向け力強くジャッジャと氷を切る氷やさんを見かける。三味線や氷を切る音が普通に聞こえてくる街というのはなかなかなく、そういう神楽坂らしい音を拾い集めるのがまた面白い。無意識の内に皆の生活から出る音で、神楽坂の音を紡いでいるのだと感じる。

私が一番好きな時間は夕暮れ時である。

神楽坂下から神楽坂上を望めば、道路を堺に、空がぐうっと伸び、建物や街路樹が空の形を作りだす。空はさらにそこから上へ横へ、わーんと溢れる。オレンジ色の空に金色の雲が流れ、坂に長い影が落ち、建物は光で反射し、街全体が黄金色に輝く。ああ、今日も無事一日が終わりそうだという安堵感を胸に、お目当ての店や、人や、音と出会うため、この黄昏の中をふらふらと歩くわけである。そんな時の心持ちは何とも言えず豊かで、仕事で縮こまった身体と心が深い幸福感の中でゆるゆると弛んでゆく。仕事の後、素に戻った自分を神楽坂の街に委ねるこの一時は、私にとってその日一番の至福の時であり、私の神楽坂はこの時なのである。